

## 新生児聴覚スクリーニング検査について

金崎耳鼻咽喉科医院

金崎 幹人

若松区東二島3丁目7-7

電話 772 - 5557

先天性難聴児を新生児期に早期に発見し、各々の持つ音声言語能力を最大限にひきだして、難聴者としてのハンディを少しでも減らそうという試みが新生児聴覚スクリーニングです。以前にも早期に難聴児を発見しようという試みは行なわれていました。しかし、その手技の特性から検出できるのは高度難聴に限られ、その検査精度も高くありませんでした。1970年代に入ってABR（聴性脳幹反応）が行なわれ始め、試みは現実味を帯びてきました。ABRは、脳内の微細な信号を扱う為に測定できない事があつたり、時間がかかたりします。この為、測定に時間がかからず、しかも自動的に検査結果を判定できるAABR（自動ABR）が開発されました。また、内耳の活動を見るOAE（耳音響放射）も加わり、新生児聴覚スクリーニングは実用化の段階に入りました。難聴をもつ新生児の頻度は、出生1000人につき1~2人位ですが、これは現在、わが国でマススクリーニングが実施されている他の先天性疾患の頻度と比べて格段に高い頻度を示しています。欧米においては、すでにAABRやOAEを用いた聴覚スクリーニングが普及しつつあり、難聴児の発見・療育が早期になされ、その言語発達に対する有効性が報告されています。我が国においては、平成12年10月に厚生労働省より各自治体に「新生児聴覚検査の実施について」の通達が出され、現在、岡山県・秋田県・神奈川県などで試験的段階ですが、新生児聴覚スクリーニングが試行されています。福岡県でもすでに複数の産科で新生児聴覚スクリーニング検査が実施されています。福岡県医師会のアンケートでは、平成12年1月から13年6月までの1年半のあいだに、29の産科施設等における新生児聴覚検査（AABRまたはDP-OAE）で、40人が要再検と判定され、8ヶ所の耳鼻科精密検査施設に紹介となりABR等で精査されました。その結果、これら40人のうち15人が中等度か高度難聴（15人中11人は両側難聴）、16人は正常聴力と診断されました。9人はアンケートの実施時点で、診断未定もしくは経過観察中でした。両側難聴児の療育は、生後6ヶ月までの早期に開始すると、それ以降に開始した場合に比べ有意に言語発達に効果があるといわれています。早期発見、早期療育が必要です。